様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３４３０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０４２６４

研究課題名（和文）教師の専門性の向上に資するリフレクションを用いた教師教育モデルの開発

研究課題名（英文）A study of cultivation of teacher education model for improving teachers' expertise from the perspective of the realistic approach and reflection

研究代表者
村井　尚子（MURAI, Naoko）

京都女子大学・発達教育学部・准教授

研究者番号：９０４１１４５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、教員養成課程の学生や現職教師が、自身の教育実践における経験をリフレクションすることによって気づいた実践的な知を、従来の理論枠組みに布置していくことによって学びを深めていくリアリスティックアプローチの仕組みを教師教育に導入することで、教師の専門性を向上させることを目指した。オランダやドイツでの実施状況を調査した成果を元に教師教育の場に様々な形で導入を試みたが、とりわけ養成課程における効果を質的・量的に分析した結果、学生の学びに向かう姿勢が向上していることが明らかとなった。また、リフレクションという営みの原理的検討を行い、教育に携わるものにとってのリフレクションの必要性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study aims to realize the significance of implementation of the realistic approach in teacher education.The realistic approach is a concept that emphasize the process of advancement practical knowledge what pre-service and in-service earned through reflection on their educational experience into theoretical framework.We research the case of two abroad countries in the Netherlands and Germany, and tried to introduce the realistic approach to both pre-service and in-service teacher education at various situation.
The results of the qualitative and quantitative analysis of the survey in the pre-service teacher education course reveal the positive attitude towards their learning and learning experience. In addition, this results also emphasize the fundamental and importance of reflection for those engaged in education fields.

研究分野：教師教育学、現象学的教育学、教育人間学

キーワード：教師教育　教師の専門性の向上　リアリスティックアプローチ　教育的タクト　リフレクション　コルトハーヘン　ヴァン＝マーネン　省察的実践

１．研究開始当初の背景

ドナルド・ショーン（Donald Schön）が1984年に *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action* を発表して以降、教師の専門性を省察的実践家（Reflective Practitioner）として位置づける動きが拡がった。その際に鍵となるのが、教育実践における自身の行為をリフレクションすることによって実践の中にある小文字の理論を見出し、それを大文字の理論（体系化された理論）と繋げて行くことによって専門性を高めて行く手法としてのリアリスティックアプローチである。リアリスティックアプローチは、ショーンの影響を強く受けたオランダの教師教育学研究者コルトハーヘン（F・Korthagen）によって実践的かつ理論的に探究開発され、欧米をはじめとする教師教育の現場で導入されている。コルトハーヘンは2010年、2014年に来日し、教員養成に携わる多くの研究者、実践者に向けてワークショップを実施した。研究代表者は研究分担者とともにコルトハーヘンを当時の所属先である大阪樟蔭女子大学に2014年10月に招聘し、同時に幼稚園教員養成課程から高等学校教員養成課程までの担当教員を集め、樟蔭リアリスティックアプローチ研究会を立ち上げた。この研究会のメンバーで本研究に取り組んで来た。

研究開始当初は、教員養成課程において「省察」の必要性は認められているものの、具体的な手法は「プロセスレコード」や「エピソード記述」が一部で用いられているのみで、リアリスティックアプローチを全面的に導入している現場は希少であった。さらに、行為へのリフレクションを教員養成の核として用いる意義についても十分には明らかにされていなかった。

また、リフレクションの意味する内容に関しては曖昧なままに用いられていた。例えば、「行為の中のリフレクション（reflection in action）」と「行為についてのリフレクション（reflection on action）」を混同している例も多い状況であった。このため、リフレクションについて現象学的な見地から研究を行なっているヴァン＝マーネンの理論を丹念に検討し、リフレクションの時間性と水準について明らかにし、その目的と意義を原理的に検討していく必要があると考えられた。

２．研究の目的

（１）リフレクションにおける知の生成の原理的検討を行う

リアリスティックアプーチの鍵となるリフレクションに関しては、上述の通りその概念規定が曖昧なまま用いられており、例えば単なる「振り返り」「反省」と同義として捉え、実践している例も散見される。このため、デューイおよびショーンのリフレクションの理論を批判的に継承し、リフレクションの原理と方法を現象学的に明らかにしているvan Manenの理論・手法を検討し、教育実践へのリフレクションの特徴と知の生成過程を明らかにすることをめざした。

（２）海外におけるリフレクションを用いた教師教育実践の調査

我が国の教員養成において、リフレクション（省察）の必要性は認識されていたものの、具体的な手法を用いた取り組みはなされていない状況であった。そこで、コルトハーヘンが提唱したリアリスティクアプローチが海外の教師教育の現場でどのように用いられているかを調査し、研究代表者・分担者が勤務する大学で実際にリアリスティックアプローチを導入する際の参考とする。

（３）リフレクションを用いた手法の教師の専門性への寄与の実証的解明

大学での理論の学びと現場あるいは教育実習における実践の乖離に一石を投じるために、実践をリフレクションし、そこからの学びを理論につなげることによってさらなる実践へとつなげて行く。この繰り返しによって教師の専門性が向上すると考えるのがリアリスティックアプローチの基本原理である。大阪樟蔭女子大学をはじめとする教員養成課程にこのアプローチを導入する際の工夫と課題を明らかにすることで、全国の教員養成課程への応用が可能となると考えられる。さらに、リアリスティックアプローチを用いた授業を受けることで、受講生がどのように変化したかを実証的に解明して行くことが必要である。また、現職教育への応用も求められる。

３．研究の方法

（１）リフレクションの原理的検討

リフレクションの原理に関しては、まずその目的を明らかにするために、教師と子どもとの関係性のあり方を「人格的（personal）」という原語から読み解き、さらにドイツ教育学で研究されてきている教育関係論の文脈から検討を行った。また、デューイ、ショーンのリフレクション概念の整理に引き続き、ヴァン＝マーネンの著書 *Tact of Teaching*、未公刊の草稿 *Pedagogical Sensitivity and Tact* などを基にリフレクションの時間性と水準について分析を行った。また、大学院の授業の中で、教育実習における出来事への現象学的記述の訓練を行い、記述によって知が生成されていく過程を明らかにした。

（２）海外のリフレクション

オランダおよびドイツの教員養成の現場、小学校を訪問視察し、現地で行われているリアリスティックアプローチについて調査を行った。さらに、リアリスティックアプローチに関する論文・文献を講読し、海外における状況を調査した。

（３）教員養成課程における実証的研究
　中高教員課程（小野寺・村井）小学校教員養成課程（濱谷・村井）、幼稚園教員養成課程（山本・中山・村井）のそれぞれにおいて、１年次から継続して、リアリスティックアプローチの方法論を導入した。この導入のあり方と課題を明らかにするとともに、効果を測定するために、受講生の記述の内容、自己評価および授業への評価（質的分析）、学生の教育に向かう意識、態度、教師としての自己効力感の授業前授業後の変化（量的分析）、卒業生へのインタビュー調査等を実施し、分析を行った。

（４）現場における応用の可能性の検討
　大阪樟蔭大学附属幼稚園、佐渡市の羽茂こども園、甲府市のかほる保育園での研修の実施とインタビュー調査、卒業生へのインタビュー調査を基に、リアリスティックアプローチを現場に応用する可能性について検討を行った。また、村井が研修講師を務めた京都教育大学主催のメンター養成講座（中堅教師向け）、日本保育協会乳児保育担当者研修会等において教育実践（保育実践）のリフレクションをグループワークの形式で実践、紹介し、教育現場に持ち帰ってもらった。

４．研究成果
（１）リフレクションの原理の解明

①リフレクションの目的と水準
　教師は子どもを一人の人として見、人格的に接することが求められているが、これは子どもを原理的に了解不可能な他者として接することである。教師は子どもを理解したいと望み、意識するしないにかかわらず、「将来子ども（達）にこのようになって欲しい」という願いをもって教育に携わっている。しかし、子どもを理解しようと望むことによって、子どもを自分の範疇の中に収めてしまいたいと望む危険性を常に孕んでいる。すなわち、子どもの他者性を自らのうちに包含してしまいたいと無意識に望んでしまっているのである。それゆえ、子どもとの日常の関係性を折に触れてリフレクションすることで、子どもに「こうあって欲しい」「こうなって欲しい」と望む教師自身の望みの背景にある価値観を相対化してみることが肝要となる。リフレクションの一義的な目的はこの点にあると考えられる。リフレクションの目的が明らかになったところで、ヴァン＝マーネンの理論におけるリフレクションの水準と目的の整理が必要であるが、これに関しては現在着手中であり、2018 年度中に発表予定である。

②リフレクションの時間性
　教育実践は他の職種の実践とは異なり、常に子どもとの真正なる対峙が求められる。それゆえ、行為の後でのリフレクションが重要になる。教育行為のただ中での教師の思考の現象学的分析と、行為の後でのリフレクションの関係については「教師の専門性と教育的タクト－reflection（省察）再考」（全国私立大学教職課程協会第 38 回研究大会）で発表を行ったほか、上記の研修会等において社会への還元を行っている。

③現象学的記述を通したリフレクションによって知が生成されていく過程の実証
　教育実習で出会った出来事についてヴァン＝マーネンの現象学的記述の方法論を用いて、記述の訓練を行なった。これらの実践を通して、出来事の渦中には気づかれていなかった「知」が明らかになってくることが検証された。具体的には大学院生がグループでの討議を通して、自らの出来事への記述を現象学的な記述となるように稿を重ねていく中で、気づいていなかった当時の感情、自身の教育観の根底にある望みが徐々に明らかになっていった。このように、「現にあるがままに」事象を記述していく現象学的記述の試みによって、深いリフレクションが可能となっていくことが実証された。

（２）海外におけるリアリスティックアプローチの実際
　オランダでは、養成課程の初年次から教育実習を行い、その経験を大学の教員養成課程の教員がコーチとしてリフレクションすることで理論の学びへと繋げていくシステムが実効的に実施されている。このコーチングを研究代表者の村井（2015 年 11 月、2018 年 2 月）と分担者の坂田、山本（ともに 2015 年 11 月）が実際に受講することによって体得した内容に関しては、下記の教員養成課程及び現場における実践、実証に活用した。また、オランダのみならず、アメリカやドイツなどでもこの方法での教師教育（教員養成と研修）が行われていることが分かった。オランダでは養成校の教員が実習生の経験のリフレクションを促し、その結果を理論の学びへと繋げるかたちで教員養成が行われており、現場にもリフレクションリーダーというかたちで現職教員や初任者のリフレクションを促す役割の教員が配置されている。このように、我が国の教師教育のあり方とは違いが大きいが、参考にしながら取り入れていくところを考えていく必要がある。

（３）教員養成課程へのリアリスティックアプローチの導入の可能性と課題の解明
　大阪樟蔭女子大学および京都女子大学の教員養成課程にリアリスティックアプローチを導入した。表 1 は大阪樟蔭女子大学の教職実践演習における経験とリフレクションの交互作用をもくろんだカリキュラムである。これらの成果と課題を下記論文および学会にて発表した。教育実習に参加する以前の初年次から 8 つの窓を用いた思考法を練習す

ることで、学生の他者への共感能力（empathy）が高まり、実習やインターンシップなどで子どもに対する際にも、子どもの感情、欲求、思考に敏感になりながら行為することができる。これは上記の質的、量的な自己評価や記述内容の分析、卒業生へのインタビュー結果から明らかとなった。

表１ 教職実践演習における導入事例

1～2	Ⅰ　４年間の学びのリフレクション
3～4	Ⅱ　教育実習のリフレクション
5～6	Ⅲ　附属幼稚園遠足事前準備
7～8	Ⅳ　４年間の学びの軌跡を１年生に伝える
9～10	Ⅲ　幼稚園遠足
11～14	Ⅴ　危機管理、消防（避難）訓練実地演習
15～16	Ⅲ　遠足のリフレクション
17～18	Ⅳ　教職の使命、責任、愛情
19～26	Ⅵ　個別の課題に関する発表準備
27～28	Ⅵ　個別課題の発表とリフレクション
29～30	Ⅶ　未来に向けてのリフレクション

組織的に本アプローチを導入するにあたっては、他の関係者の理解を得ることが重要であること、また、各教員がリフレクションのコーチングの技術を身につけること、組織の中にリフレクションリーダー的な分掌を置く必要性などが明らかとなった。

（４）教員養成課程におけるリフレクションを用いた手法の開発と検証

①8 つの窓を用いたリフレクションの手法を開発し、その意義の質的・量的検討を行った。

教育実習等における子どもとの関りについて表２のような枠組みを用いて学生相互にリフレクションを行う。

表２リフレクションを促す８つの窓

	教師（実習生）	子ども
何をしたか	A	E
何を考えていたか	B	F
どう感じたか（その時の感情）	C	G
本当は何をしたかったか	D	H

この８つの窓を用いたリフレクションの仕組みを、初年次から授業の中に導入した。本研究ではとくに、表１の教職実践演習の授業の事前事後の変化を定量的に分析した。履修者 129 名中、事前事後とも調査に参加し、就職先として保育職に就くことが決まっている 60 名を対象として分析を行った。結果として、授業の前よりも事後の方が、「保育者になるのが天職である」「教職での学びが有意義であった」「保育者として必要な技術を身につけた」といった質問項目に関して有意差または有意傾向が見られた。さらに、「自分の行動を客観的に振り返ることができる」という項目と「子どもに寄り添うことができる」「子どもの気持ちが理解できる」という質問項目では高い相関関係が見られたこと、大学における学びが有意義であると自覚するほど、自身の保育者としての学びが十分でないと自覚しているということが明らかとなった。すなわち、自身の学びについてリフレクションが可能になることで、不足していることを客観的にみることができる、リフレクティブな姿勢が身についたと言える。

②リフレクションのリフレクションの手法の開発と応用

次に、実習で出会った出来事について８つの窓を用いてリフレクションを行った、その行為へのリフレクション（リフレクションのリフレクション）の手法を表３のようなかたちで開発し、授業内で実施した。

表３ リフレクションのリフレクションのための記述内容

１－１　子どもの立場に立って状況を見ることの難しさへの気づき
１－２　教師と子どもの願いや考えていたこと、感情の齟齬への気づき
１－３　教師自身が本当は何を望んでいたか、何を願っていたかへの気づき
２－１　１－２、１－３の前提となっている教師の子ども観、教育観への洞察

上の各項目に関して自由記述を求め、その分析を行った。結果として、状況を子どもの立場に立ってみることが難しいとした記述が、回答者 107 名中 76 名と多く、その困難さへの気づきがもたらされていることが分かった。さらに、1-2 に関して、教師と子どもに齟齬があった部分として、思考 24 名、感情 18 名、欲求 67 名となっており、教師の望みと子どもの望みの齟齬に気づくことで、単なる振り返りに止まらない本質的な気づきに至っていることが分かる。このことは、（１）①で明らかとなった「子どもの他者性」への気づきがリフレクションの営みにとって核となるということを実証する結果となった。なお、教師と子どもにおいていずれの項目にも差異がなかったとする記述は 16 名であり、リフレクションをすることで、約 85％の受講生が子どもと自身との齟齬に気づいていることが明らかとなった。

③学びの樹の開発と応用

教員養成課程の初年次からの学びの動機づけと、現職となってから仕事を継続し、学び続けていくためには、自身のめざす教員像とそこに向けての学びの道程を自覚することが必要であると考えられる。この学びの道程を図にすることで明示化するツールとして「学びの樹」を開発し、それぞれの授業において作成を促した。

表４ 学びの樹の構成

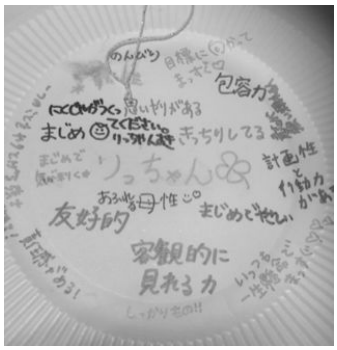
木の葉	自分の強みを生かしながら、どのような教師になりたいかを一枚ずつの葉に書く

幹の上	理想の教師になるためにこれから学んで行くこと
幹の下	理想の教師になるためにこれまでに身につけたこと
根っこ	共に学ぶ友人から指摘してもらった自分のコアクオリティ（強み）

ポジティブ心理学の考え方を援用した自身の強み（コアクオリティ）を自己評価するとともに、他者から指摘してもらい、一本一本の根っこに書くことで強みを生かして理想に近づくという思考が可能になる。学びの樹は自己評価において高い評価を得たとともに、最終授業終了後のアンケートにも、この樹に関するポジティブな感想が数多く見られた。

④コアクオリティの自己同定の再確認を促す「紙皿」

養成課程の最後の授業において、課程での学びを共にして来た同級生からコアクオリティを指摘してもらい「紙皿」に記載してもらうという授業を行なっている。自分の強みを自身で自覚していることもあるが、重要な他者から指摘してもらうことで、指摘された強みが自己のあり様を規定していくと考えられる。例えば、「ヴィジョンを持って行動する」強みを指摘された人は、行動を起こす際に「ヴィジョン」を意識しつつ行うようになるというように。養成課程を卒業し、職に就いたあと、折に触れ「紙皿」を見返すことでレジリエンスを高め、教師としての学びの姿勢を前向きに高めていくことがめざされた。学生の自己評価の数値も非常に高かったが、「紙皿」を作成した授業の１年後、２年後、現職に就いた教師たちが集い、コアクオリティの再同定を行なっていることが本取り組みの効果の一つのエビデンスとなり得るといえるだろう。



以上の研究成果は、『科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号 15K04264 教師の専門性の向上に資するリフレクションを用いた教師教育モデルの開発研究成果報告書』としてまとめた。

（５）社会への還元

上記の研究成果は教員養成現場、現職研修、大学 FD 活動等において還元している。

教員養成現場としては、研究代表者および分担者の勤務先および非常勤先である京都女子大学、大阪樟蔭女子大学、奈良女子大学、滋賀大学、帝京大学などで活用しているほか、保育者養成校の教員の授業研究会などで報告したことで、他大学でも活用が始まっている。また、現職研修としては、日本保育協会の乳児保育担当者研修会、大阪樟蔭大学附属幼稚園、佐渡市の羽茂こども園、甲府市のかほる保育園、名古屋市立保育所次席研修会、旭川民間保育所相互育成会主任研修会、京都教育大学主催のメンター養成講座（中堅教師向け）、立命館学園教員対象研修会、京都府高等学校公民科研究会、大阪樟蔭女子大学 FD 研修会などで実施している。

高校生に向けては、立命館宇治高等学校での授業を行い、平成 30 年度からは立命館宇治高等学校コア探究推進委員会委員として高校生のキャリアを見据えたリフレクションを授業の中に活かす取り組みを行って行く。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 村井　尚子、坂田　哲人、保育職への実感をもたらす省察の営みに関する一考察～教職実践演習における実践例から、京都女子大学発達教育学部紀要、査読無、第 14 巻（２）、2018、29-36

② 中山美佐、山本一成、濵谷佳奈、小野寺香、村井尚子、坂田哲人、リアリスティック・アプローチを用いた教職実践演習についての研究、大阪樟蔭女子大学研究紀要、査読無、第 7 巻、2017、165-176

③ 山本一成、中山美佐、濵谷佳奈、小野寺香、村井尚子、坂田哲人、教員養成課程におけるリアリスティック・アプローチを導入した授業実践、大阪樟蔭女子大学研究紀要、査読無、第 6 巻、2016、187-198

④ 小野寺　香、村井　尚子、中山　美佐、濵谷　佳奈、山本　一成、坂田　哲人、教員養成課程におけるリアリスティック・アプローチ導入の理念と意義、大阪樟蔭女子大学研究紀要、査読無、第６巻、2016、81-89

〔学会発表〕（計 14 件）

① 村井　尚子、教師の専門性と教育的タクト－reflection（省察）再考、全国私立大学教職課程協会第 38 回研究大会、第２分科会口頭発表、2018/5/20

② 村井　尚子、坂田　哲人、山本　一成、中山　美佐、落合　陽子、松野　敬、今井　豊彦、保育にとってのリフレクションの意義を考える、日本保育学会第 71 回大会自主シンポジウム、2018/5/13

③ 中山　美佐、葛藤を乗り越えて−ぼく、貸してあげるよ−、日本保育学会第 71 回大

会、ポスター発表、2018/5/13

④ 村井　尚子、保育者と子どもの人格的関係、日本保育学会第 71 回大会、自由研究発表、2018/5/12

⑤ 村井　尚子、坂田　哲人、保育者としてのキャリアを見据える授業実践の研究―教職実践の授業において―、日本保育者養成教育学会第 2 回研究大会、2018/3/14

⑥ Naoko MURAI、PHENOMENOLOGICAL ASPECTS OF NURTURING THE TEACHER: The meaning of the pedagogical relation between student teacher and teacher educator、International Human Science Research Conference、2017/7/13

⑦ 村井　尚子、坂田　哲人、リアリスティック・アプローチを用いたリフレクション＝省察の理論と実践、京都教育大学教育研究交流会議全体会、2017/06/01

⑧ 中山　美佐、村井　尚子、大阪樟蔭女子大学における実習指導室の取り組み－リアリスティック・アプローチを用いて－、日本保育者養成教育学会第 1 回大会、2017/3/5

⑨ 村井　尚子、教育的タクトの養成をめざした教職課程の授業のあり方に関する一考察、日本教師教育学会第 26 回研究大会自由研究発表、2016/9/17

⑩ 村井　尚子、濱谷　佳奈、中山　美佐、山本　一成、小野寺　香、坂田　哲人、リアリスティックアプローチを用いた教員養成の実践②–教職実践演習を中心に–、教師教育学会第 26 回研究大会ラウンドテーブルⅤ、2016/9/17

⑪ Naoko MURAI、Tetsuhito SAKATA、An Attempt to Absorb the Reality Shock in the Teacher Education Program - from the Perspective of Realistic Teacher Education、The Pacific Early Childhood Education Research Association 16th Annual Conference (Bangkok Chulalongkorn University)、2016/7/9

⑫ Naoko MURAI、An attempt to develop student teachers' empathy towards parents of kindergarten students、The Pacific Early Childhood Education Research Association 16th Annual Conference (Bangkok Chulalongkorn University)、2016/7/9

⑬ 村井　尚子、坂田　哲人、現職段階を見据えた教師教育実践のあり方にかんする一考察：教職実践演習における実践例から、日本教師教育学会第 25 回研究大会自由研究発表、2015/9/20

⑭ 村井　尚子、濱谷　佳奈、中山　美佐、山本　一成、小野寺　香、坂田　哲人、リアリスティックアプローチによる教師教育の実践–大阪樟蔭女子大学の事例を中心として–、教師教育学会第 25 回研究大会ラウンドテーブルⅢ、2015/9/20

６．研究組織

(1)研究代表者

村井　尚子（MURAI, Naoko）
京都女子大学・発達教育学部・准教授
研究者番号：９０４１１４５４

(2)研究分担者

濱谷　佳奈（HAMATANI, Kana）
大阪樟蔭女子大学・児童学部・講師
研究者番号：６０６１３０７３

小野寺　香（ONODERA, Kaori）
奈良女子大学・アドミッションセンター・准教授
研究者番号：６０７０８３５３

坂田　哲人（SAKATA, Tetsuhito）
帝京大学・高等教育開発センター・助教
研究者番号：７０５７１８８４

山本　一成（YAMAMOTO, Issei）
大阪樟蔭女子大学・児童学部・講師
研究者番号：７０７３７２３８

中山　美佐（NAKAYAMA, Misa）
大阪樟蔭女子大学・児童学部・講師
研究者番号：９０７３８４８６

(4)研究協力者

落合　陽子（OCHIAI, Yoko）
山梨県甲府市認定こども園かほる保育園園長

松野　敬（MATSUNO, Takashi）
新潟県佐渡市幼保連携型認定こども園羽茂こども園園長

今井　豊彦（IMAI, Toyohiko）
日本保育協会研修部次長

秦　真衣子（HATA, Maiko）
奈良県奈良市立伏見保育園保育士

光井　千絵（MITSUI, Chie）
大阪樟蔭女子大学附属幼稚園教諭